法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-13

キャリア支援を考える 6 : 職場体験は物見遊山ではない

Kawakita, Takashi / 川喜多, 喬

(出版者 / Publisher)
教育新聞社
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
教育新聞 / 教育新聞
(号 / Number)
2557
(開始ページ / Start Page)
3
(終了ページ / End Page)
3
(発行年 / Year)
2005-07

Hosei University Repository

キャリア支援を考える --6

職場体験は物見遊山ではない

法政大学キャリアデザイン学部教授　川喜多　喬

岡本太郎の有名な言葉に「芸術はバクハツ（爆発）だ！」というものがある。太郎の早口の、癖のある言い方で、これを聞き間違って「芸術はバカズ（場数）だ！」と受け取って感心した人がいる。

なるほど、場数を踏むこと、苦心惨憺の道を歩み続けること、何度も挫折し立ち直ること、総じて努力をし続けること、これが味わい深い老大家の作品を生むのであろう。

もちろん夭折の天才の作品もある。しかし例外であればこそ天才である。まして、アーティストではない多くの人にとって、良い仕事ができるようになるには場数を踏まねばならない。仕事がちゃんとできるようになるには長いキャリアを歩んだり走ったり躓いたり、いきつもどりつ、迷い道をも経験して、幅と深さをつけていかねばならぬのである。

仕事の奥深さをたった2、3年ぐらいの経験で「分かっちゃった」などと思われては困る。商売の厳しさを、机上の「ビジネスモデル」づくりごっこで克服できると思われては困る。

小学生なら1日の職場見学ぐらいでよろしい。しかし、2時間ほど職場を見て、仕事の世界の厳しさが分かりましたと大学生が言うのは噴飯ものである。中学生なら2、3日の仕事体験ぐらいでよろしい。しかし、それぐらいの「インターンシップ」とやらを大学生がやって業界事情が理解できたなどと言ったら、どやしつけるべきことである。

高校生なら夏休みに技能実習をする（商業科の高校生が商店街診断を行うなど）のは結構なことである。しかし、知識も技能ももたぬ大学生が1カ月のアルバイトをして職業基礎能力が身についたと胸を張る者がいたら、世の中をなめるんではない、と諭すべきである。

大学生なら、試験就業に入る。これが本来のインターンシップであって、法学部の学生が法律事務所で試しに働き、経営学部の学生が会計事務所で働き、医学部の学生が医院で働き、心理学の学生がカウンセリングの現場で働き、文学部の学生が舞台裏で働く…。これならインターンシップと言うべきである。それでいてはじめて、学校で教わっていることが世の役に立つのかどうかが分かる、自分の力が試せる、職場選びができる。

しかし今、世の職場体験ごっこには、就職に役立つらしいと聞きかじった学生の物見遊山、労働力不足の企業による安手のアルバイト確保、学校での勉学は問わない、ともかく入ってくれという企業からの拝み倒し、あるいは本当の現場の修羅場を知らぬ者が考案した思いつき的キャリア支援策……。こういうものもあるやに見える。物見遊山の斡旋業者まで出る時代。くわばら、くわばら。

<AN10113317>「教育新聞―The educational news」No.2557/pp3/2005.7.28